

# 春のあしおと



鈴木正子

○  
室の中にじっとしていられないような静かな日である。私たちは製作の予定を変えて、園外へと出かける。寒さにちぢかんでいた手足をのぼしたあの小川のほとりまで行こう。多分もうあの小川には、春の音が流れていることだろう。

あの小川のそばの梅の木の白い花も、満開になっているはずである。

毎年毎年行くので私には、その有様がもう眼にうかぶ。子どもたちはそれぞれに語らいながら私のあとをついて来る。

想像していたとおり小川のほとりには、白い梅が盛り、ゆるやかな流れはもうすっかり、春の音をたてていた。

前にひろがる田圃には麦がちよびちよびと頭をもたげどこまで

もどこまでも続くあぜ道にはもう春の草が萌えはじめている。

「おーい」と言えば、とどきそうに赤城山がくつきりと近い。深く息を吸いこむと、青草と枯草の匂いが、交りあつて胸一ぱいに広がる。

「さあひとやすみしましょう」

私たちは小川のほとりの枯草の、温かいぬくもりの上に足を投げ出す。

私「いい気持ねえ」

子ども「鳥がないてる」

子ども「何のとり？」

私「ひばり」

子ども「みえないね、高いんだね、空」

私「ほんとに高いなあ」

子ども「まぶしいなあ」

子ども「先生！ かけてもいい？」

私「麦ふまないようにね」

子ども「先生、もち草あつたよ」

私「あら、よく知ってるのね」

子ども「僕もみつけた」

子ども「あたしも」

私「あら、これ少しがうんじゃない？」

子ども「うーん、ちよつと丸すぎるね、葉っぱ」

子ども「これそうでしょ」

私「あつ、そうよ」

子ども「もち草つて何にするの」

私「草餅つくるの、みどり色のいい匂いのお餅たべたことあるかな」

子ども「ある、ある」

子ども「お節句にたべるお餅だよ」

子ども「うちのおかあちゃんが、もうせん、作ってくれたもん」  
こんな話に余念のない子ども。だまってじっと座っている子ども。あぜ道をどこまでも、どこまでもかけて行く子ども、つみ草に夢中になっている子ども。

初春の野は子どもたちに、たくまぬ教材をいっぱい投げ出していてくれる。そのかずかずに眼をみはる想いである。

私は暖かい空気を全身でむさぼり吸って、その恩恵に浴している幼児にみとれる。

そして、今日子どもをつれて、野に出て来たことを、さらに感謝する気持で一ぱいになった。

今朝は鮎が元気です

今朝は鮎の目玉がうごきます

今朝は鮎のうろこが光ります

ね、水があたたかくなつたから

ね、もう春が来るから

今朝は鮎が起き出して来たのですね

水槽の鮎をかこんで子どもたちは、私のこんな話をじっと耳を

澄ませて聞いてくれた。

春ということばを口にしただけで、何となく軽やかな朝のひとつきである。

「あらだれでしょう、こんなにお人形たおしてしまったのは」

私はおもわず室に入りざま、大きな声をたててしまった。きのうから大切に大切に作りあげた、みんなのおひな様が、ひな壇の上にくるころとこころがって、どれがだれのやらも分らない有様だ。

「だーれ、みんなで一生懸命つくつたのに」

子どもたちは独り言を言いながら、お人形を起して行く私の手元を、だまってじっと見つめている。

それから。全部なおして何秒たったろう。私はおもいがけないことので起りに、もう一度眼をみはった。

暖かいので開けた窓からのび込んだ春風がそよと人形をたおして行つたのである。

「まあ、風さんだったのね」

「うん、そうだったんだね」

「ごめんなさいね、いたずら坊主のおいたかとおもっちゃった。」

「ごめん、ごめん」

「風だったんだねえ」

室の中は急に生気をとりもどして、明るい笑声がまきおこる。

風のいたずら、春風のいたずら、それにしても私の性急さ。

「ごめんなさいね」

幾度も幾度も子どもたちに詫びなければならぬ今日の失敗で

ある。

(群馬大学附属幼稚園)